

4

こども おとな 共通問題

マッタ

<魂－孤独>

1983年

油彩 キャンバス

66.5 × 46.9cm

<海と結ばれるカップル>

1983年

油彩 キャンバス

67.4 × 47.4cm

<皮肉な友情>

1983年

油彩 キャンバス

65.1 × 47.6cm

「作品のタイトルや展示の並び順にこだわらずに、ストーリーは自由に想像力を働かせて考えてください。」

マッタ (1911年～2002年)

本名はロベルト・セバスチャン・アントニオ・マッタ・エコーレン (エチャウレン)。チリ生まれ。パリに渡りシュルレアリスム運動に参加。第二次世界大戦中にはニューヨークに渡り、戦後アメリカ美術に大きな影響を与えた。

幻想的で、夢のような情景。SFの世界のようでもあるし、宇宙人の世界のものである。また太古の世界のようにも感じる。

マッタは、始めに絵の具を垂らしたりすることで無作為に生まれた線や色から、何かを見つけ出し、そこから描いていくことで独特の世界を生み出していった。見つけ出すことによって、見えないモノを見えるようにしていったのである。

マッタは古代文明や遺跡に関心が深かった。この作品もイタリアのローマ近郊にあるタルクィーナ (タルキニア) の古代エトルリア遺跡に靈感を得ている。タルクィーナは近年世界遺産にも登録されている。

近未来的なイメージと同時に、古代のおおらかで、至る所に霊が宿っていたような、不思議な想像力も感じさせてくれる。

5

こども問題

パブロ・ピカソ <赤い枕で眠る女>

1932年

油彩 キャンバス

38.0 × 46.0cm

「夢の内容を、自由に考えてみよう」

パブロ・ピカソ (1881年～1973年)

スペイン生まれ。20世紀を代表する画家。彫刻、陶芸、版画などでも幅広く活躍した。

ピカソが51歳になる年の作。モデルは若き恋人マリー・テレーズ・ワルテル。ギリシャ彫刻を思わせる彫りの深い顔だちに大きな鼻、わずかに白い青色のひとみ、美しいブロンドの髪を持つ少女。ピカソとは30才近くも年が離れていた。

この作品は、パリの北西65キロにある小さな村ボワジュールの小さな城をアトリエで制作された。眉間にくぼみのない、なだらかで大きな鼻は、彼女をモデルにした作品の特徴である。前、横、後ろ側など、複数の視点から見た姿を同じ平面に描いているところはキュビズムを、またゆがんで入り組んだ姿はシュルレアリスムを通して獲得したピカソの手法が反映している。モデルが眠っているのは、おそらく室内ではなく、芝生の広がる庭を望むバルコニーのようなところである。

緑、赤、黄の三原色を用いて澄んだ色調で描かれた、豊かで性的な女神の姿。目を閉じてすやすやと眠る彼女が目目を覚まさないように、息をこらえてそっとしているピカソのときめきと充実した幸福感が伝わってくるようである。

6

大人問題

川端健生 <宇曾利山湖>

1995年

綿布着色

240.0 × 182.0cm

「宇曾利山湖 (うそりやまこ) がある県は青森県。日本三大霊場 (高野山、比叡山、恐山) の一つ、「恐山」(おそれざん) を形成する湖。火山活動によってできたカルデラ湖。宇曾利湖 (うそりこ) ともいう。恐山はこの湖を中心とした8つの山の総称。下北半島の中央部に位置する。死者への供養の場であり、子供の守り神とも言われる地藏菩薩が信仰されている。祭りの際に人々は、「イタコ」の口寄せ (死者の霊を語る霊的な力を持った巫女が語る言葉) を聞く。」

川端健生 (1944-95年)

京都府生まれ。日本画家。一貫して人間を主要なテーマとし、そこに日本の土俗信仰の交流息づく生死観を込めた作品を制作。

川端健生は、あの世とこの世が交差するような土地に関心が深く、たとえば若い頃には岩手県遠野 (カップパや座敷わらしの民話などで有名) を何度も訪れている。

描かれている子どものモデルは、自分と兄であると考えられている。川端は、昔を懐かしむ気持ちがかきわめて強かった。「魂が生まれ、そして帰って行く風景の静謐を、子供の瞳の内に見たい」と語っている。

この作品は川端の最後の作品 (絶筆) である。

用語解説

シュルレアリスム (超現実主義)

20世紀初頭にフランス中心で展開され世界に広がった芸術運動。本当の現実、リアルなモノはどこにあるのだろう、どんなモノなのだろうと追求した運動である。

それを見つけるためには、自分が意識していない部分の自分を発見する必要があった。そのために、この運動では、無意識や夢に注目し、作画的な方法を避け、偶然性や無作為を取り入れた制作方法を取り入れたのである。(自動筆記、デカルコマニー、コラージュなど) この運動は、文学を中心に美術、映画など様々な分野に広がった。

さて、シュルレアリスムは日本語にもなっている「シュール」の語源でもあるが、日本語でいう「シュール」とはニュアンスが違う。シュルレアリスムとは、単に夢のようだとか幻想的とか奇異なといったものではない。

この用語は、「シュル」(SUR、フランス語：～を超えた、～の上の) という前置詞と、リアリズム (現実主義) が合わさった言葉である。「シュル：超」のニュアンスは、「離れている」という感じではなく、「ものすごく」「なみはずれた」というニュアンスを持っている。それは、若者言葉の「チョーカッコいい」などの「チョー」に近いかもしれない。

つまり「現実離れしている」というよりも、「現実性の度合いがなみはずれて高い」ということである。「ものすごくリアルだ」という感じだろうか。

このシュルレアリスム運動は、本当の現実、リアルなモノはどこにあるのだろう、どんなモノなのだろう、と追求した芸術運動である。

それを見つけるためには、自分が意識していない自分、気づいていない自分、うすうす気づいているが知らないことにしている自分、などを発見する必要があった。そのために、この運動では、無意識や夢に注目し、作画的な方法を避けて偶然性や無作為を取り入れた制作方法を行った。(自動筆記、デカルコマニー、コラージュなど) そして、文学を中心に美術、映画など様々な分野に広がった。

キュビズム

20世紀初頭にピカソやブラックが創始した造形的な実験、芸術運動。。ものの形を幾何学的な形態やこまかい断片に分解し、それらをふたたび組み合わせることでその描き方は、平面上に立体的に見せかけてきた、これまでの遠近法に代表されるような方法を乗り越える革新的なものであった。